南十字星の下（1959）

DAGLI APPEMNINI ALLE ANDES
FROM THE APDENNINES TO THE ANDES［米］

メディア 映画
ジャンル ファミリー　ドラマ
製作国 イタリア
色彩 Color
時間 115分
初公開日 1959/07/11
公開情報 イタリフィルム

【解説】

アミーチスの『母をたずねて三千里』の映画化で、原作を大分ダイジェストして紀行ムードを強めた、なかなかの秀作だ。イタリアのジェノヴァから出稼ぎでアルゼンチンに赴いた母に会いに、１１歳の少年マルコは修道女の荷物運びを手伝って、移民も乗せる貨物船で密航を図った。向かうは母がいると聞くブエノス・アイレス。船内では気の好い与太者二人組が何かと世話を焼いてくれ、入国審査もうまくくぐり抜けた。が、母はメイドをする医師一家と共に、そこから更に河を幾日か遡るロザリオに行った後。少年は同じジェノヴァ出身のメキネスさんのポンポン蒸気で河を往く（このゆったりした船旅の描写は爽やか）。附近まで行くと今度はメキネスさんの友人のロンバルディさんが徒歩で町まで案内してくれたが、やはり一足遅く、医師一家はコルドヴァへ向かったとのこと。食堂でマルコはロンバルディさんと途方にくれたが、やはりイタリア出身の若い衆に、草原で牛を運ぶガウチョの一行を紹介してもらう。その旅で彼は子供扱いされることなく苛酷な思いをしたが、やがてツラくあたる牧童とも友情を育み、コルドヴァ手前のインディオの集落で一行と別れる。マルコはそこで地元の少年と祭りを楽しみながら、医師の家を捜しだし、遂に母との再会を果たすのだった。原作だと更にすれ違いが重なり、出会う人もみな善人とはいかないので、余計じりじりと泣かされたが、ここでは感傷より少年の成長記録にウェイトを置いて、何しろアンデスの景観描写が見事で旅愁を誘われる。ダチョウの捕獲やコンドル退治など民族的興趣もいっぱいに盛り込まれ堪能した。お母さんがバーグマンを想わす美貌のロッシ＝ドラゴというのも、変にリアリズムじゃなくて嬉しかった。

【クレジット】

監督	フォルコ・クィリチ	Folco Quilici
原作	エドモンド・デ・アミーチス	Edmondo De Amicis
脚本	フォルコ・クィリチ	Folco Quilici
	ジュゼッペ・マンジョーネ	Giuseppe Mangione
撮影	ティーノ・サントーニ	Tino Santoni
音楽	フランチェスコ・デ・マージ	Francesco De Masi
出演	マルコ・パオレッティ	Marco Paoletti
	エレオノラ・ロッシ・ドラゴ	Eleonora Rossi Drago
	ファウスト・トッツィ	Fausto Tozzi
	ギレルモ・バッターリア	Guillermo Battaglia

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.